

木曽駒ヶ岳西方山麓の植物採集会

橋 渡 勝 也

第 127 回例会は、昭和63年10月15日(土)16日(日)の両日、木曽郡上松町の東方、木曽駒ヶ岳西方山麓において採集会が行われた。

参加者は、当日参加の方を含めて井波一雄、小林富雄、宮島吉彦、元島清人、小口好久、平林睦夫、橋誠治、赤羽敏明の諸氏と幹事の橋渡の、総勢9名であった。

15日は、夕方宿舎の国民宿舎「寝覚めホテル」に集まり、夕食後、持ち寄った標本を同定したり、御嶽山噴火の火山灰による植生への影響を調べた資料を見て意見交換を行ったりして、情報交換並びに懇親を深めた。

第2日目(16日)は、当日参加者と宿舎前で合流し、上松町在住の楯先生の案内で、駒ヶ岳山麓へ向かった。標高約1,000mの駒ヶ岳二合目で車を降りて、駒ヶ岳への登山道を、井波先生にいろいろと教えて頂きながら散策を始めた。

キブシ、ヤマブドウなどが紅葉し秋の深まりを感じさせた。滑川の川原では、アキグミがたわわに赤い実を付け、砂地にはカワラハハコの群生も見られた。花崗岩の美しい滑川の支流北股沢を横切る辺りから雑木林になり、リュウノウギク、ホソエカエデ、ミズナラ、ツノハシバミ、サンカクズル、ヤマヨモギ、ノコンギク、バッコヤナギ、ヤマハハコ、カナビキソウ、ヤクシソウ、フジウツギ、マンサク、アワブキ、フユノハナワラビ、カリヤスなどを観察した。途中林中の路傍で、ホソバツルリンドウを見つけた。さらに、アオダモ、ムラサキシキブ、ウラゲエンコウカエデ、マツブサ、タツノヒゲ、ベニバナイチヤクソウ、ヤマブドウ、オオアブラススキ、ヘビノネゴザ、ノブキ、ガマズミ、クガイソウ、ゲンノショウコ、キンミズヒキ、アキノキリンソウ、ヤブサンザシ、ダンコウバイ、モトゲイタヤ、ホソバトウゲシバ、タマアジサイ、ウメガサソウ、フクシマシャジン、ヒメマイズルソウ、サワシバ、クマイチゴ、オトコエシ、オニルリソウ、タンナサワフタギ、ハンショウズル、フデリンドウ、カワラハンノキ、スズ、ヤマボウシ、チョウジザクラ、ミヤマガマズミ、カシワ、ネジキ、ハネガヤなどを見た。

ここで、今回の採集会で注目していた一つアザミ類が登場した。ちょうど、ナンブアザミとアズマヤマアザミが並んで生えている所に出くわした。数個

体を見比べているうちに両者の形態を併せ持った雑種を思わせる個体があった。頭花はアズマヤマのように密集しているが、総苞片は長くナンブに近くやや反り返っている。後日、標本を奥原先生に見ていただいたところ、「アズマヤマアザミとナンブアザミの雑種で「トウナン(東南)アザミ」と名付けたものであろう」というお教えを頂いた。

滑川の支流に沿った道は平坦で歩き易い。オニイタヤ、メタカラコウ、ウスゲタマブキ、サワギク、アカソ、ヤマイヌワラビ、ウマノミツバ、ヤマゼリ、クモキリソウ、ホドイモ、メギ、オオモミジ、エイザンスミレ、ヒナウチワカエデ、ヒキオコシ、ウスゲクロモジ、コバノカマツカ、トチノキ、カツラ、ミツバアケビ、ヒトツバカエデ、イヌブナ、ツリバナ、フクオウソウ、ユモトマユミ、ミヤマイトナシダ、ミヤマイラクサ、ミツバベンケイソウなどを見ながら歩き、三合目に当たる「敬神の滝」に着いた(1,200m)。

この流周辺は湿気が満ち薄暗く、ミヤマクマワラビ、ハクモウイノデ、オンシダなどのシダ類が林床を被っている。その中に珍しいカラクサシダを見せて頂いた。このような環境では、よほど注意して見ないと見逃しそうな小形のシダに一同感動して見入った。

同じ道を引き返し、林道を北上してアカマツ林に入った(1,150m)。ここでは、ノギラン、オクモミジハグマ、ヒカゲノカズラ、コシアブラ、ウリカエデ、タンタサワフタギ、オトコヨウゾメ、ツルリンドウ、コミネカエデ、ジンバイソウ、クロモジ、マンネンスギ、などを見た。

さらに、北に向かいカラマツ林縁を歩いた(1,190m)。ここでは、ノイバラ、リンドウ、エゴノキ、シラカンバ、ネズ、アケボノスミレ、オヤマボクチ、センブリ、フジウツギなどを観察した。ここで昼食を取り、午後は、林道をさらに北上した。途中、御嶽山を眺めるのに絶好の場所に案内してもらい雄大な眺めを満喫した。

途中で車を降りた沢筋の林床では、ハルナユキザサ、フタリスズカ、メグスリノキ、アサノハカエデ、メタカラコウ、ミツバフウロ、カンボク、アズマヤマアザミ、アキチョウジ、キハダ、サルナシ、ムラサキシキブ、シロモジ、コアジサイ、イソノキ、メ

ギ、チドリノキ、ミツバウツギ、サワラ、カツラ、トモエソウ、ナンブアザミを見た。

次に、小野川に沿って駒ヶ岳に向かう登山道を歩いた。次第にカツラなどの巨木の林立する立派な林に入り(1,220 m)、ミヤマベニシダ、ジャコウソウ、キケンショウマ、ハコネシケチシダ、レイジンソウ、イタヤマメイツ、サカゲイノデ、ハクウンボク、カツラ、ヒノキ、オオバアサガラ、ウラジロカガノアザミ、クロカンバ、バライチゴ、コウシンヤマハツ

カ、トチノキ、オヒョウ、クサソテツ、アケボノソウ、クサギ、イケマなどを見た。

J R 上松駅に向かう途中では、マルバノキ(別名ベニマンサク)の自生地を訪ねた。ちょうど紅葉が始まっており、花も盛りの美しい姿を観察した。一緒に生えていたシロモジも実を付けていた。

最後に、今回の場所を紹介して下さり当日も案内して頂いた楯先生、標本を見て下さった奥原先生に、心より感謝申し上げます。

〔植物ニュース〕 137. オオアブノメ *Gratiola japonica* Miq.

湿地に生える1年草で、日本では本州(宮城県以南)・九州に分布するとなっている。特に稀品でもないようであるが、なぜか長野県ではその記録がないようなので、報告しておく。

1988年7月18日に諏訪郡富士見町の休耕田で採取した。この水田は、休耕されて相当の年数を経過したと思われ、ガマが密生していた。湿地で10cm位の深さの水がついていた。その一部にガマのない開放水面があり、そこに相当数密生していた。近くの他の休耕田では見られず、この水田1ヶ所だけであった。(今井建樹)

138. ネコヤマヒゴタイ *Saussurea modesta* Kitam.

1988年9月16日に飯綱高原の海拔凡そ950 m、牟礼村、上村の少し上のハンノキ林の林縁にて採取した。

ネコヤマヒゴタイ=キリガミネトウヒレンとする説が現在とられているが、ネコヤマヒゴタイは本州の近畿及び中国地方に分布するとされたものである。

キリガミネトウヒレンは霧ヶ峰で1932年に飛田広氏が発見して、北村四郎博士によりネコヤマヒゴタイとは異なるものであるとして、命名されたようである(*S. kirigaminensis* Kitam.)。これは、霧ヶ峰の他にハケ岳山麓の諏訪側はもちろん、山梨県側佐久側にも分布が見られる。

日本の野生植物(平凡社、北村四郎)では、両種を同じものとして扱い、中国地方~関東地方に分布するとなっている。

分布上から見て問題があり、飯綱高原はおそらく北限ということになると思うが、県下の分布を明らかにする必要があると思う。

本種の同定をいただいた、国立科学博物館の門田裕一氏にお礼申し上げます。(今井建樹)

139. オウレンの花色

近年ウスギオウレンの名が紙面に散見するようになり本県南木曽町柿其も産地と本誌20号に報告されている。私の手元にも1979年3月22日に同地で写したウスギかと思われる両性花と白花の雄花との2枚の写真があるが、これがウスギであるとの認識がなかったが、昨年4月6日大桑村野尻で見たのはセリバ型で花は大体終わっていてウスギかと思われるものが少し残っていた。花の終わったもの2株を持参して自宅の花畑に植えたところ今春開花し1株はウスギらしいもので他の1株は白色とみられるもので各株4花と標準より多くつけた。

木曽の南部ではコセリバ型も見えていたので今年3月20日今井建樹氏と出かけた。今年は開花が早く昨年見た野尻のセリバ型は終わっていた。南木曽町妻籠のコセリバ型は花が残っていてウスギらしいものであった。またウスギと報告された同町柿其でも花が残っていてウスギらしいもののほか今井氏が白としか見られないというものも混っていた。

以上の3ヶ所で見たのがウスギであるとすればウスギなるものはがく片が幾らか波うっていて極めてうすい黄色で透き通っているようにも見えるものである。なお平凡社の「日本の野生植物」にキクバは日本海側に分布するとあるが、東海地方が分布域とされるウスギにもキクバ状のものもあるというのは理解出来ない。

一方昨年自宅で開花したセリバ型は今年も開いたがこれは黄色でがく片は上記ウスギかとみられるものよりやや短く波うちもやや少く透き通っているようには見えない。これはどこから来たものか思い出せないが昨年開田村ヘリュウキンカの観察に行き持参して植えておいたものが今年それと同じ黄色で開花しおしぼにしたところ多少緑色が加わった。これはキバナオウレンとするに異存がなさそうである。

とにかくセリバ型にもコセリバ型にもウスギと白色の両方がありそうである。(奥原弘人)